

《連載》

## 至誠の足跡(1)

# 無冠の陶芸家 河井寛次郎

### 至誠、無冠の陶芸家

これから、シリーズで西田哲学でいう「至誠の人」らしい人を紹介していく。第1回に選んだのは、陶芸家、河井寛次郎(かわいかんじろう)である。

河井寛次郎(1890-1966)は、浜田庄司ほどの力量がありながら、人間国宝も文化勲章も辞退して受けなかった無冠の陶芸家。「単なる民芸作家ではなく、詩人であり、哲学者であり、宗教にまで高められた信念の人であった。誰からも愛され、親しまれた喜びの人であった」(橋本喜三、文献A)。「至誠」とはこの人のことを言う言葉であろう。

河井寛次郎は、明治23年(1890)島根県安来町にて誕生した。生家は壊され、今は生誕地の碑がある。

寛次郎は、中学二年の時、叔父足立健三郎の助言で陶器の道に進むことを決心した。20歳の時、松江中学を卒業し、東京高等工業学校(現、東京工業大学)窯業科に入学した。在学中、バーナード・リーチ、浜田庄司を知った。大正3年、[24歳]工業学校を卒業して京都市立陶磁器試験場に入り技手として釉薬の研究を行った。大正5年には、浜田庄司が同じ試験場に就職してきて、以後共に研究に励んだ。翌年寛次郎は試験場を退職し、二年間清水六兵衛(後の六和)の顧問となり、各種の釉薬を作った。

大正9年、[30歳]山岡千太郎の好意により、京都市東山区五条坂鐘鉢町の清水六兵衛の窯を譲り受け、住居と工房を設け、陶器を作った。この年、浜田はリーチに同行してイギリスへ行き、寛次郎は、三上直吉の娘やす(後、つねと改名)と結婚。

大正10年、第一回創作陶磁展を東京、大阪の高島屋で開催した。この時河井は批評家から絶賛された。

「河井の奇才は科学に立脚して豊富なる天分を発

揮し・・・氏一流の創造を以てしたので全然旧様に泥まず、新意を出ししかも雅潤、頗る見るべきものがある」(『東京朝日新聞』文献A62)

「陶芸史家の第一人者とされていた次郎坊主人こと奥田誠一は、『鐘溪窯第一輯』のはしがきで、「天才は彗星の如く突然現るるものである・・・其閃々たる光芒が吾が芸術界に如何なる光彩を投じて行くであろうかは、吾人の大なる興味と期待とを持つ所である・・・」と絶賛した。」(A63)

しかし、河井の個展と同じ時期に柳宗悦主催の朝鮮民族美術展が行われていたが、それを見て河井は李朝の陶磁に心を打たれ自分の陶器に自信を失った。

「創作展と同じ時期に神田の流逸荘で朝鮮民族美術展が開かれていた。柳宗悦が集めた李朝の陶磁器を並べた展覧である。無名の職人がのびのびと自由に作ったものだが、巧みな美しさを追わぬどっしりとしたその作域に河井は感動した。・・・その時の河井のことを浜田は『河井との五十年』の中で、「(会場に)はいったとたん、一ぺんになぐりつけられたような気がした。今までの自分の仕事というもの、衣裳の勉強であり、お化粧の勉強であった。中身の体はどうしていたか、心がけはどうしていたか。そう思うと、恥ずかしくて李朝の陶器を見ているうちに、その場にいたたまれないような気がした。・・・とにかく驚いて帰ってきて、それから仕事ができなくなりました」と書いている。」(文献A63)

しかし、東京高島屋の宣伝部長、川勝堅一を知り生涯の親交を結んだ。戦争中の一時期を除いて、高島屋は毎年河井の陶磁展を開催した。河井は批評家から「国宝的存在」と絶賛され、名声の高まりに反し、自らの作陶に疑問をいだき煩悶しはじめた。

大正13年、浜田が帰国し、三カ月、河井宅に滞在した。浜田を介して柳宗悦を知った。柳は民芸運動の理論的主柱になった人で、河井と浜田がその主たる実践者となった。河井の悩みに対して、浜田は「これからは珍しいものや難しいものとかを作るよりも、ただいいものが作りたい、無名の陶工が作った健康で美しい実用陶、それだけです」と説いた。(A69)

大正14年[35歳]には、第五回陶磁展開催したが、技巧が簡素化した。柳、浜田とともに、和歌山へ木食上人の遺跡をたずね、その旅の中で、民衆の手による工芸を民衆的工芸ととらえ、「民芸」という言葉を創作した。翌年柳、浜田とともに、「日本民芸美術館設立趣意書」を作成し、知人に配り、民芸運動の開始となった。

昭和11年[46歳]河井は、棟方志功を自宅に招き、四十日間滞在させ、禅の講義などをして、大きな影響を与えた。河井は禅に造詣が深かったが、この頃は考えたものであったことが後の回心でわかる。

### 世間が認める河井

昭和12年[47歳]パリ万国博覧会に出品された「鉄辰砂草花図壺」がグランプリを受賞した。関係当局の要請にもかかわらず、寛次郎の出品承諾が得られないことを察した川勝が独自の計らいで、自己の所蔵品の中から提供した作品だった。この年、室戸台風で傷んだ旧宅を解体して新築した。現在の京都五条坂の「河井寛次郎記念館」である。

昭和20年、戦争中、「この世このまま大調和」の精神的な大転換(後述)を体験した。昭和21年高島屋での個展が復活し、以後毎年陶器展が開催された。昭和22年には、寛次郎の詞「火の願い」を棟方志功の版画で制作、また「いのちの窓」を陶土に刻んだ陶板を完成した。

### 無冠の一陶工

昭和32年[67歳]川勝の計らいで出品した昭和14年作の「白地草花扁壺」が、ミラノ・トリエンナーレ国際工芸展でグランプリを受賞。しかし、河井は喜ばなかった。河井には、無形文化財(人間国宝)、文化勲章の授与の話があったが、彼は辞退した。陶芸では、浜田庄司が著名であるが、浜田を超えるほどの才能がありながら、日本では全く榮譽を受けていない「無冠の陶工」であった。

昭和41年(1966)[76歳]11月18日、死去。

### 河井寛次郎の回心

河井寛次郎は、名誉を嫌い、賞や勲章なども辞退して超俗の生き方をしたが、その原点は太平洋戦争中の変革体験にあるようである。いつ空襲があるかもしれない、いつ死ぬかもしれないという不安の中にあつた時、不意に、このままでいいんだ、という安心につつまれた。河井は、太平洋戦争中に、精神的な大転換をおこした。河井にとっては、娘、須也子が、次のようにいう大事件であった。

「今や風前の灯となった京都。これで見納めになるかもしれぬと、遣り場のない沈痛の思いで、父は独り出かけてゆく。其処で、心の裡に思いもなかった強い衝撃を受ける事態に出逢うのである。……今まで父が持っていた観念的な人生感や抱いてきた世界観が百八十度がらりと大転換させられ、思惟の大転機となったのである。……」

「生死一如」とか「自他合一」の真髓を解らせてくれた「葉っぱと虫」は、父に善智識の公案を与えてくれた天からの贈物であったにちがいない。それからの父は、その後の「生きかた」や「仕事」にも、これが原点となり、すべての原動力となって力強く展開していったものと思う。これを境として、父を悩ませてきた微熱は陰をひそめ、やがて退散してい

った。」(文献B268)

彼が語った原文を引用する。戦時中の京都、毎日のように夕方になると東山の高みに上っていた。その日もまた警報がひんぱんに鳴っていた。新日吉神社の近くの木立の下のいつも腰掛ける切株に腰掛けて、暮れて行く町を見ていた。

「その時でありました。私は突然一つの思いに打たれたのであります。なあんだ、なあんだ、何という事なのだ。これでいいのではないか。これでいいんだ。これでいいんだ。焼かれようが殺されようが、それでいいのだ。——それでそのまま調和なのだ。そういう突拍子もない思いが湧き上って来たのであります。そうです。

はっきりと調和という言葉、私は聞いたのであります。

なんだ、なんだ。これで調和しているのだ。そうなのだ。——と、そういう思いに打たれたのであります。しかも私にはそれがどんな事なのかははっきり解りませんでした。解りませんでした。しかし、何時この町や自分達がどんな事になるのか判らない不安の中に、何か一抹の安らかな思いが湧き上って来たのであります。私は不安のまま次第に愉しくならざるを得なかったのであります。頭の上で蝉がじんじん鳴いているのです。それも愉しく鳴いているのです。左様なら、左様なら京都。

それからは警報が鳴っても私は不安のまま安心——といったような状態で過ごす事が出来たのであります。しかし、何故殺す殺されるというような事がそのままよいのだ。こんな理不尽なことがどうしてこのままでよいのだ。——にも拘わらず「このままでよいのだ」というものが私の心を占めるのです。この二つの相反するものの中に私はいながら、この二つがなわれて縄になるように、一本の縄になられてゆく自分を見たのであります。」

それから一週間程して山科へ出かけた時、山桐の大木が立っていた。この大きな木の葉が悉く虫に食われて、葉脈だけ残った葉をつけているのを見た。

「葉っぱは虫に食われ、虫は葉っぱを食う——見るからにこれは痛ましいものそのものであります。それにしても、この日はどうした日だったのであります。私は見るなりに気付いた事でありましたが、痛ましいというその思いの中に、これ迄かつて思った事もない思いが頭を擡げたのであります。葉っぱが虫に食われ、虫が葉っぱを食う。——これ迄はこうより他に見えなかった事が、今日という今日はどういう日だったのであります。

葉っぱが虫に食われ、虫が葉っぱを食っているにも拘わらず、虫は葉っぱに養われ、葉っぱは虫を養っている——そういう事をその時はっきり見たのであります。食う食われるというような痛ましい現象が、そのままの姿で養い養われるという現象であるというのは、抑々これは何とした事なのであります。

この間中からむらむらしていた事が、これでよいのだ、これで結構調和しているのだというような、しかしつきつめると何故そうなのだか解らなかった事が、ここではっきり正体を現わしたのであります。不安のまま安心。さてはそうなのか、そうだったのか。米や魚がものを作ったり、豚や牛が考えたり、書いたりしないと誰が言えるでしょう。

蝶が飛んでいる。葉っぱが飛んでいる。

暮れる迄山科の村々を私は歩き廻っていました。」

(以上、文献Bc243-5)

「はっきり正体を現わした」という。後でみる河井の自他一如的な言葉や、至誠の生き様を見ると、禪者のような深い体験であるように思われる。とにかく、河井は、論理的理解ではない「安心」を得たようで、同じものをみても誰でも彼と同じ回心がお

こるわけではない。知識、理解によらないで得た「安心」は、人生感に大転換をきたし、知識での理解と違って、その後、微動だにしない。

### 至誠の人

河井寛次郎の誠実さにくたれた人が多い。彼の伝記や、彼の言葉、彼の生きざまを知ると、現代の良寛さまと言ってよい至誠の人である。言っている言葉とやっている行動がずれている人が多いのであるが、言行一致の希有の人である。彼を慕う人が多い。

「単なる民芸作家ではなく、詩人であり、哲学者であり、宗教にまで高められた信念の人であった。誰からも愛され、親しまれた歓びの人であった」(橋本喜三、A34)

「作家としては自分を捨ててひたすら造化の神に仕えるが、社会人としての自覚は道学者のように謹厳であった。立派な作品は立派な人間でないと作れないと常に考えていて、まず自分の暮らしの筋目をきちんと立てるのである。」(橋本喜三、A181)

「心の美しい、生まれのたくましい詩人」(保田与重郎、文芸評論家、文献A110)

「河井は天性詩人である。自由律俳句で知られる尾崎放哉や種田山頭火の代表作と比べて、河井よりすぐれていると言う評家は信用しない」(寿岳文章、英文学者、文献A109)

「あらゆる生命体を尊び、これを受容し、志をもった人間として誠実に生きることを謙虚に学んでいた」(河井須也子、河井の娘、文献Aのp170)

娘から称賛の言葉を受ける父親は少ないだろう。あらもみえるはずの娘から見ても至誠の人であった。

「私は文壇では佐藤春夫の門下とされているが、私のほんとうの先生は河井先生ですよ。」(井上靖、作家、文献A173)

「何回か河井寛次郎を書こうと思ったことがあ

る。・・・結局のところは書けなかったのである。氏の無類の美しい人柄について語ろうと思っても、語ろうとしたとたんから氏は逃げてしまう。作品も同じである」(井上靖、文献A188)

### 言葉は読む人のもの

竹村牧男(2012)が、「真理には階層性」があるということをお大乘仏教では教えていたという。河井も『いのちの窓』の序文で、これと同じことを言う。人間は、物を見て、言葉を読んで、みな、一人一人違った解釈をする。言葉だけでない。記念館の中庭に丸い石がある(次ページ)。これをどう解釈するであろうか。まちまちであろう。

河井の著書『いのちの窓』は、詩集のようである。詩のように短い言葉が書かれている。その最初に次の序文がついている。

「此等の言葉はすべて読まれる人の言葉であって、自分の言葉ではない。自分の言葉でありようがない。それと言葉の中に出て来る自分というのは人と同意義であって、この間に何ものをもさしはさむ事は出来ない。もしか間違っただけのものがあるならば、それこそ自分であって人ではない。」(文献Ba188)

物の見方は、およそ、二つに大別できる。世俗的、二元的見方を持つ人が理解できる見方と、世俗的な見方、もう一つは二元的な見方でない、自己を脱落した自他不二の見方。河井が書いた言葉は、後者なのであろうが、読む人は前者の見方で解釈する人も多いであろう。すなわち、もう読まれた言葉は、河井の言葉ではない。読む人の言葉になる。仏教經典もそうである。西田幾多郎や竹村が言うように、仏教經典に深い真理を読める人は少ないのだろう。

大切なのは、言葉の表現の前の事実が何であるかだ。河井の言葉を読んで感動するか、しないか。どう解釈するか、言葉の前の事実を河井がどうつかま

えたのか、それを見抜くのは読む人次第だ。

生まれた時から井戸の中に住む蛙は、大海があることを予想もできない。この地上は、一真実の世界、極楽世界であるというが、人間の眼では、一人一人別々な世界を描いている。河井の言葉は、種々の読みを許す一種の経典である。人間の深い真実を書いている。だから、この序文のようなことを書いている。浅い真実と深い真実との間には、超えることが難しい眼に見えない壁がある。仏教学者の知性でも容易に超えられない壁が。そして、学のない素朴なチューラパンタカ（釈尊の弟子で頭が悪かったという人）や念仏の妙好人の実践で超えられた壁が。

### 自己を脱落

自己を脱落した河井は、病気、仕事になりきる。

「私は病気で寝ています。

私は病気をしていません。

病気が病気をしています。

病気のことは病気にまかせ

病気の病気わしゃ知らん」(文献Ba203)

戦争中に自己を脱落した河井は自分の生死を問題にしていない。「私が」病気だというのが、「私」って何だ。「身体か」。「私は病気をしていない」とすると、私は身体ではない。そうすると「私は何か」。「私」が病気でないのなら、病気のことは病気にまかせておいて、私はしたい事をする。「私はもうすぐ死ぬかもしれない？」という人には、河井は言うかもしれない。「私は病気をしていません。私は死のことをしりません。死のことなんか死にまかせておいて、私はしたいことをする」と。

「仕事の仕事をしている仕事する自分。される仕事。するものもされるものもない仕事。仕事は仕事を吸い込み、仕事を吐き出す。」(文献Bb228、212)

「はだかはたらく 仕事すつぱだか」(Ba197)

### 参考文献 (A,Bなどの後の数字はページ)

A「陶工河井寛次郎」橋本喜三、朝日新聞社、1994.

上記の生涯は、主としてこれによる。

B「火の誓い」河井寛次郎、講談社、1996.

Ba その中の「火の願い」、Bb 「いのちの窓」

Bc 「自解」「後記」、B (その他、本書から)

竹村牧男(2012)『宗教の核心—西田幾多郎と鈴木大拙に学ぶ』春秋社

(写真1) 河井寛次郎記念館。(京都市五条坂、清水寺の近くにある)。河井の住居だったところ。裏に窯がある。



(写真2) 中庭の石 (記念館のホームページより)  
<http://www.kanjiro.jp/>

